

## 成長につながる指導とは？ ～スキー教室の1コマから～

校長 近藤 幸栄

今年も3年生のスキー教室が、1月22日に行われました。当日、気温は低かったものの天候には恵まれ、充実したスキー教室が実施できました。毎年、このスキー教室の子どもたちの様子を見てみると、子どもたちのスキーの上達の早さに驚かされます。初めてスキーを履く子も多く、最初は思うように歩くこともままならない子もいます。しかし、少し指導を受けると午後には、全員がリフトに乗り、斜面を滑って降りてくるほどの上達を見せます。

これは、二ノックススキー場のエンジョイコースが本当に初心者向けであること、また、大勢の指導ボランティアの方々によって、少人数で適切に教えていただけていることなどが大きな要因だと考えます。

このわずか1日のスキー教室ではありますが、子どもたちから「滑れるようになったよ」「上手くなったでしょ」「楽しかった」という声が聞かれます。子どもたち自身も、自分が上手くなった、滑れるようになったという手応えや自信を感じ、目に見える上達があることによって達成感や充実感があり、それがまた、自信へとつながっているのではないかと思います。



そんな中で、考えさせられる場面もありました。ボランティアの指導者の皆さんは、スキーに関してはエキスパートな方々がほとんどです。ですから、滑ることや止まること、曲がることについて、的確な練習やアドバイスで指導してくださいます。転んで立ち上がるのに苦労している子どもに、私が手を貸して起こそうとした時です。「先生、手を出さないで」と声をかけられました。「先生方は、手を出しすぎ」と注意を受けました。よかれと思って「手を貸すこと」が、「子どもたちの上達」をむしろ妨げることになることもあるとハッとさせられました。この場面だけ見れば、手を貸して起こすのは簡単なことです。しかし、いつもいつも手を貸すわけにはいきません。確かに手を貸すことによって、自分で起き上がるという技能の習得を遅らせてしまうことにもなりかねません。起き上がるためには、スキーを谷側（山の下の方）に置き、体を山側（山の上の方）に置く。そして何より、体が斜面に垂直でなければ起き上がりにくいものです。「自分で起き上がることもスキーの大切な技能」です。余計なお世話をしそうになった自分を反省しました。

私たち大人は、とかく子どもたちができない、困っていると手を貸したくなるのが常です。先回りして、子どもたちが困らないように「転ばぬ先の杖」になろうとすることも多々あります。しかし、本当に子どもの成長を考えた時、目と心は離さずに、見守る・自分で考えさせる・やらせてみるということも大切なことではないかと改めて考えさせられたスキー教室でした。